

LIBRARY INFORMATION



図書館報の再刊にあたって.....	館長	山口慶四郎.....	2
発刊にあたって.....	事務長	松村俊一.....	3
図書館コンピュータ化の現在.....	専門員	青山弘.....	7
ザルツブルク大学附属図書館について.....	ドイツ語学科	マンフレッド・セルナー.....	12
学術情報センターと教育・育成プログラム.....	学術情報係	青山功.....	13
IFLA東京大会参加記.....	整理係	松延秀一.....	14
貴重図書解題シリーズ「サアディー全集」.....	ペルシャ語学科	ハーシム・ラジャブザーデ.....	15
写本について		香川優子	

大阪外国語大学附属図書館 1987.3.25

MATION

創刊号
(通刊5号)

図書館報の再刊にあたって

—いま図書館が当面している課題のいくつか—

館長 山口慶四郎

正直いって、このところ、静かな附属図書館は多用である。ここ粟生間谷にキャンパスを移すにあたり、大学所蔵図書の図書館集中管理を大学として公式に謳ったが、それが十分に実現しないまま、すでに移転8年にして書庫はほぼ収容力の限界に達しており、分野によっては蔵書が横積みになっている状態である。別館をどこに建設するか、それと本館との有機的繋がりをどのようにうちたてるか、つまり附属図書館の将来計画を、図書館が文系大学である本学の心臓部分であるということを十分に念頭におきつつ、構想している昨日今日である。

また、昨秋、図書館事務部に学術情報係が新設され、すでに活発に機能している。これは前館長が故八木教授（その1周忌が目前に迫っている。惜しい人をなくしたといまも残念に思う毎日である）であった時期に手掛けられた仕事である。限られた館員による係増設であるから問題をかかえていることは事実であるが、かならずや有効な結果をうるものと確信している次第である。

新規事業として、図書館が主催する「図書展示会」を昨年暮に2回開催した。本館が誇る石濱文庫を記念する公開講演会の開催と同時期に初めて実施した『オーレル・スタインと石濱純太郎』、（勝藤、岡崎両教授のご協力をえた）と『魯迅没後50年記念図書展覧』（中国語学科と共催）がそれである。狭隘なキャンパスの上本町時代の図書館ではやりたくてもできなかった展示会であり、移転作業が終わり、図書館の電算化作業もようやく目鼻がつきはじめた昨年、その開催が実現したものである。

この4月には新入生を主とした対象にする展示会を予定している。また5月にはドイツ語学科と共催で、ゲーテに関わる図書を展示する計画が進んでいる。本館には、わが国でも稀なゲーテ全集を所蔵しているのである。この全集は、

本学の前身、大阪外国語学校が開校されて間もなく購入されたものである。私はいま、創学時（大正末期）に本学が購入した図書のリストを点検中だが、当時の先輩教員がきわめて勝れた図書（時代が経過したから貴重になったというだけではない）を、まことに体系的に買い求められたことに深く頭を垂れるとともに、永遠の本学附属図書館の蔵書体系はかくあるべしと考える日々である。

このことと関連して、集書作業はいかにあるべきか、これも図書館にとり大きな課題である。これについては次号に別にその現情が詳しく説明されるはずである。館員（司書）と図書委員会の担当教員とによる共同作業で比較的うまく作業が進められているが、もちろん、その作業方法はいっそう改善されていかなければならないであろう。

ところで、本館報は1977年6月にその第4号がでてから10年近く休刊状況にあった。キャンパス移転、図書館の電算化作業で図書館が多忙を極めたことがその大きな原因であったと思う。ところが最近、図書館員一同が活性化するなかで再刊の声があがった。昨年末の係長会議の席でのことである。私もその声が館員の口から自発的にでることを秘かに期待していたところであった。学術情報係新設の肯定的な回答がこのような形ででてきたものと思っている次第である。今度こそ本館報が休刊することなく定期的に発行されることを祈るものである。ご承知のように、附属図書館からは『AVジャーナル』も刊行されている（その最近号は昨年9月発行）。両紙の生々発展に読者諸氏の絶大なご支援をお願いする。

このほか本館ではいま、所蔵の貴重図書保管のいっそうの完全化作業も進められている。しかし、貴重書を館内奥深くに保管しておくだけが能でないことはいうまでもない。その積極的

な利用なくしてはなんのための貴重書かということになる。利用者のためにこの点われわれはいまなにをなすべきか、この回答をだすこともいま本館に課せられている大きな問題である。これに関連して『昭和24年以前の旧分類図書の所在点検および電算化(目録作成)事前調査』なる作業が教育研究学内特別経費の配分をうけ進められている。創学時に勝れた図書を所蔵したことは先にふれたが、当時の図書が整理され、利用者各位による積極的なそれらの活用を期待しての作業なのである。

最後に、本館がいま新たに構想している『地図コーナー』新設についても一言しておこう。見方によっては本学はわが国の国境真近くに位置する大学である。このような本学に世界の地図類が所蔵され、それが日常的に活発に学内外で利用されることは大きな意味があろう。地図は他の一般書籍に比し、体裁が雑多であるとか、

保管取り扱いに工夫がいるとか、いくつかの特徴があり、このため地図情報の有効利用がなされないままにあるというのが大学図書館、公共図書館共通の悩みである。これに挑戦し、地図資料を総合的に収集し閲覧に供しようというのがわれわれの構想である。研究者にとってはもちろん、学生諸君にとっても有益であり、楽しいコーナーになるはずであるこのプランの完成には多くの歳月を要しようが、いま図書館はその困難な作業の第1歩を踏み出したのである。

文系大学である本学にとって附属図書館がその研究・教育のセンターたることについては異論はなかろう。この附属図書館には解決をまたれる課題がまだまだ多くある。外大の発展に大きな責任をもつ附属図書館はいま、完全燃焼してこれら課題に取り組んでいるということをお願いして、本館報再刊のご挨拶とする。

(870206)

発刊に当って — 外大図書館発展史 序章 —

事務長 松村俊一

このたび、約10年間ほどとだえていた館報が、名称も新しく、復活発刊できたということは、本学図書館にとっては、誠にめでたいことである。

「館報を復活させてはどうか……。」と学術情報係長からの提案で始まったのだが、すでに館内全体でその気運があり、自然発生的にこのような発言が、出るべくして出たものと思われる。言わば、客観的に自館を熟視できる、ゆとりのある時期が到来したとも、言えるのかも知れない。

久しく、とだえていたという理由は、「学舎移転」と「学術情報化」である。昭和52年以来、まさしくこの二つのことに、今日まで追いまくられ、息もせわしく、ひた走りに走ってきた感がある。

幸いにして、転ぶこともなく、大旨目標の70パーセント程度のところまで、こぎつけたのではなかろうかと、自負している。

この成果は、10ケ年の間、それぞれの持味のある良き図書館長に恵まれ、それも個人プレーでなく、連携的といえるプレーにより、なされてきたからであることは、言うまでもないが、やはり、館長を含む全図書館員が、それぞれの分野で、惜しみなく熱意を払い、努力を傾けたことの結実であると思われる。

また、ここで忘れてはならないことは、迷うことなく、回り道をせず、到達できたのは、先達が構築した、秀れた指針があったからなのでなかろうか……。

文部大臣から学術審議会に「今後における学術情報システムの在り方について」諮問があったのが、53年11月で、その後、審議会の中間報告の公表が、54年6月になされたのである。

本学としては、それより以前の50年11月頃、すでに、当時の図書館長から「図書館施設計画作成にあたって直面するいくつかの問題点」と題して、長期構想を館報に掲載、学舎移転に際

してのコンピュータ・システム化および大学間ネットワーク・システムの確立の不可避性ならびに「視聴覚施設の拡大延伸」について、教授会をはじめ、学内一般に対し、意見の具申をおこない、また、積極的な批判と教示をも併わせ求めていたのである。

更に、2年後の52年2月には、将来計画委員会を通じて、教授会に対し、「学舎移転ともなう附属図書館および語学教育研究施設の建築設計基本要綱」が提出されたが、その中味についても、当時として、いや現時点でも、なお斬新と言える発展方向および近代化について、明快なタッチで、提言されていたのである。

それらが、今日、本学図書館の特徴となって現われている所以でもある。

私は、53年から図書館に就任したのであるが、この秀れた指針である教科書を掲げ所に、今日まで歩んでこられたことは、本当に恵まれていたと言えるのである。

振り返って、新図書館棟は、鉄筋5階建、延床面積6552㎡を54年1月に完成。同年5月の連休明けから、夏頃にかけて、32万冊の図書を送り、同9月25日授業開始と同時に、開館の運びとなった。

勿論、前述の要綱の主旨に従って図書館棟は、大学の中核として、A棟（8階建研究棟）・B棟（講義棟）・事務局および大学会館に囲まれた、アカデミックゾーンの中心的位置に建築され、相互の連絡利用に有利なよう、配置されたことは言うまでもない。

本学内で図書館は、抽象的ではあるが、重要な地位をしめている。その意味で、移転時から今日まで、文部本省および大学当局からの手厚い支援は、予算計上にみられるとおり、明らかである。

例えば、大型コレクションについてみても、北欧民族・歴史関係(54年)・イタリア作家叢書(55年)、ロシア・スラブ言語関係(57年)、インドネシア現代史政治資料集成(58年)、アラブ・イスラム・アフリカ言語文化関係(60年)と、総額4500万円の蔵書蓄積となった。

また、このほか、機械化では、ブックディテクションシステムやエレコンパック（電動密集書架）などの導入となったわけである。

視聴覚関係では、LL教室をはじめ、視聴覚教室・スタジオ・音声実験室・同時通訳室・デジジョンルーム・無響室・同時通訳室など、海外受信室をのぞくほとんどが完成されたのである。

昭和37年、旧大阪学舎において、ランゲージ・ラボラトリー（語学演練装置）として新設され、完成披露会が催されて以来、25年の歳月に亘ったが、これらの輝かしい進展は、先に述べた文部本省および大学当局の援助のほか、視聴覚教育委員長をはじめ、各委員と、これらを支えてきた視聴覚資料係長以下係員諸氏の努力を忘れてはならない。

自動化といっても、機械は日進月歩で、今日では、さほど珍しくもない設備と化しているが、それでも設置当時は、モデル校である築波大ほか、2・3の大学にしかなかった画期的なもので、やや大げさに言えば、全国津浦浦の関係機関などから、連日見学があり、案内と説明でおおわらわな慌しい日々を過したのである。

このような、新しい図書館のもとで、蔵書の整備、充実または運用面での改善をはかった。

大阪上本町学舎の狭隘な図書館に比べ、その面積も約4倍強となり、今まで雑然と配架されていた図書資料が、再配架されたことにより、効率的な利用ができることとなった。

また、各種資料の集中管理をおこない、図書委員会の協力のもとに、規程を改正し、各研究室当りの備付基準を設けたのもこの頃であった。

創立以来、蒐集されてきた稀観図書、あるいは、貴重文献資料なるものについても、認定基準は必ずしも明確なものがないが、教育研究上または調査活動上きわめて重要とみとめ、しかも、明らかに再入手が困難とされる資料は、「貴重資料」として取扱い、その他の一般資料のなかに混配しないよう、かつ学内外の関係機関に広く利用できるよう、3階書庫の一部を間仕切って、原本の保存と展示を兼ね備えた、特別の保存室および格調高い木製の書架ならびにローケースを設けたのである。

因みに、それらの資料は、約450点5092冊にのぼっている、貴重図書のもつ内容を公開・展示することは、その時代の考証・価値観をみる上で、学問上きわめて重要なことである。先では、マイクロフィルム化することにより、利用がよ

り一層促進できることになると信じている。

また、本学図書館には、多数の文庫を擁しているが、その代表的なものとして、石浜文庫がある。

この文庫は、故石浜純太郎博士旧蔵の学会屈指といわれる東洋学の一大文庫で、総計4万余冊にのぼるが、博士が本学の蒙古語、(現在モンゴル語) 学科のご出身という関係から、本学図書館に受入れられたものである。

この文庫を土台とし、本学の学術研究の成果を広く公開するため、毎年定期的に学術講演会を催している。54年以来、今年で第9回目を迎えることになる。

一方、本学の業務電算化計画は、初頭に述べたとおりであるが、その構想としては、昭和50年にさかのぼる。

概算要求は同57年で、同59年1月26日内示を受け、同12月17日NEC 150/68システムを搬入、翌60年1月から稼動、今日に至っている。

当初は、電算機に弱い全くの素人ばかりの集まりであったが、先行館の指導を得ながら、専門員を中心に、全館員が結集し、力一杯の協同作業を展開したものである。

ようやくにして、60年6月3日から、開架図書(約4万冊)のみであったが、貸出業務が開始できた。機器構成および値引率のことで、他大学とのバランス上、できるだけ有利な条件で、まとめさせようとする背景もあったからでもあ

るが、業者との交渉で、必要以上に時間を費やし、大変な労苦となったが、それにしても、本学開学以来の記念すべき電算化システムによるサービス業務を、開始することができたのである。

60年11月に、発注・受入・目録システム、61年4月には、雑誌システムとそれぞれ完成、目下トータルシステムとして、順調に稼動している。ナショナルセンターとの接続も、今年度末か、62年度早々に予定するなど、見通しがつくところまでこぎつけたことは、幸いというほかはない。

本学図書館の玄関中央フロアーに、一際目立つ石彫一基「遙かなる森よ」が、据置かれている。

これは、一昨年、下川前事務局長のお力添えにより、後援会から寄贈賜った、心に残る素晴らしい記念の贈りものである。

図書館は、芸術的・文化的雰囲気が必要だと思われる。残念ながら、そのような環境整備は、未だ達成されていない部分がある。玄関壁間装飾をはじめ多々あるが、今後時間をかけて、実現しなければならないと考えている。

思えば、大正11年、大阪外国語学校(9学科)として上本町8丁目に誕生、以来、現在まで67年目になる。開学時の学生定員は240名、蔵書1万冊~2万冊程度のささやかな出発当時から考え、驚異的な発展をとげたと言えるのではなか

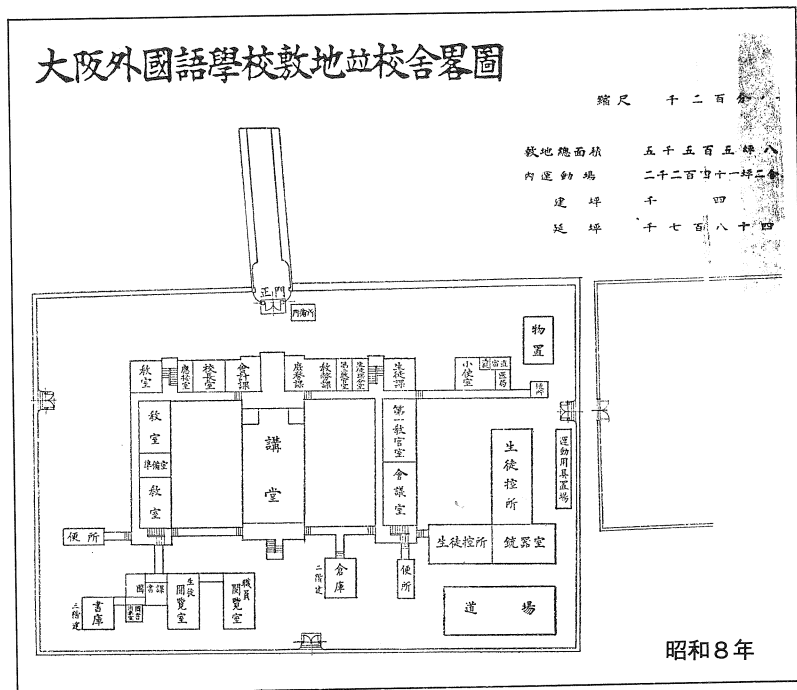


石彫「遙かなる森よ」

ろうか。

昭和19年3月13日、大阪外事専門学校となり、学生定員720名、蔵書6万冊に増加、翌20年戦災で校舎を焼失することとなったが、書庫入口の鉄扉1枚により、6万冊の図書が焼失をまぬがれたと聞く。校舎は、キリスタン大名で有名な高山右近の城跡、高槻市（元工兵隊跡）に移転。

昭和24年の学制改革によって、大阪外国語大学となる。12学科、学生定員1240名、蔵書81796冊、同27年、前期1・2年は、高槻市に残留、後期3・4年は、大阪学舎でそれぞれ授業が行なわれた。



当時、大阪から高槻へ、高槻から大阪へと、図書館とは言いがたい図書室へ、毎日、風呂敷につつんだ重たい本をかついで、往復されていたのである。外大にとっては、この時代が最も苦難な年月であったと思われる。

その頃、高槻学舎のグラウンドと近くの野辺では、春には、蝶が舞い、草花が咲き、野苧も生え、秋には、萩が咲き、茱萸や棕の木に實が成る、のんびりとした田園風景画そのものであった。しかし物的には、全く恵まれない貧困な時代を過したものである。

移転は、昨日のこのように思えるが、気が

ついてみれば、足かけ8年近くにもなる。

サイクルの早い昨今、現代社会において、一昔も二昔も、いや、もっと長い年月をかけてきたことになる。

寒い冬を越し、冷たい風雪に耐えた椿の葉が、光っているように……、そんな風に館員の皆さんが、本学図書館の今日の存在を、考えているのではなからうか……。感傷または自己満足しているわけではない。

蔵書数は、移転時で32万冊あったが、現在40万冊となっている。収蔵能力42万冊では、そろそろ限界がきている。

その対応が課題となっていることもさることながら、この際、図書館として、今再び中期的あるいは長期的な展望に立って、わが図書館の未来像を考えなければならない、そんな時期がきていると言っても、過言ではないのである。

昨年4月、現職で亡くなられた八木館長のことを思いうかべながら、もう一度ご冥福を祈るとともに、同先生といっしか語り合った、更なる新しい近代図書館を、21世紀に向けて、夢をはせてはどうだろうか……。

個性豊かな空間のある開放的な閲覧室、芸術的装飾のある文化的環境で、あるいは、澄みきった空……、花壇に咲

きみだれる草花も閲覧でき、時には、木々の梢の隙間からこぼれる太陽の光や、星の光とランプの灯で、読書できる野外閲覧室……。

そんな雰囲気の中で、よりよい機能が発揮できる夢のような図書館を、想像してもよいのではなからうかと思っている。

以上新しく、Library Infomationの発刊に当って、大ざっぱではあるが、本学図書館の発展経緯と、とりとめのない雑感を、述べさせてもらった次第である。

図書館コンピュータ化の現在

専門員 青山 弘

図書館にコンピュータが導入されて、この1月で丁度2年になります。

図書館のコンピュータはオフィス・コンピュータ、いわゆるオフコンと呼ばれるクラスのもので、専門家でなくても操作でき、設置場所を選ばない簡便さをもっています。さらに、テレビのブラウン管と同様のディスプレイ画面と、漢字を含む日本語処理が実現することによって、一層コンピュータは操作し易く、身近なものになってきました。

機種はNECシステム150/68で、機器構成は

図1のようになっています。

図書館のシステムは、貸出・返却、検索を中心とする図書管理システムが60年6月に、図書の発注、受入、支払、目録を中心とする図書管理システムが60年11月に、雑誌管理システムが61年4月に各々スタートし、図書館の主要な業務の流れはすべてコンピュータ化されるに至りました。

ここでは、本システムの特徴であるオンライン目録を中心に、コンピュータ化の現在を紹介したいと思います。

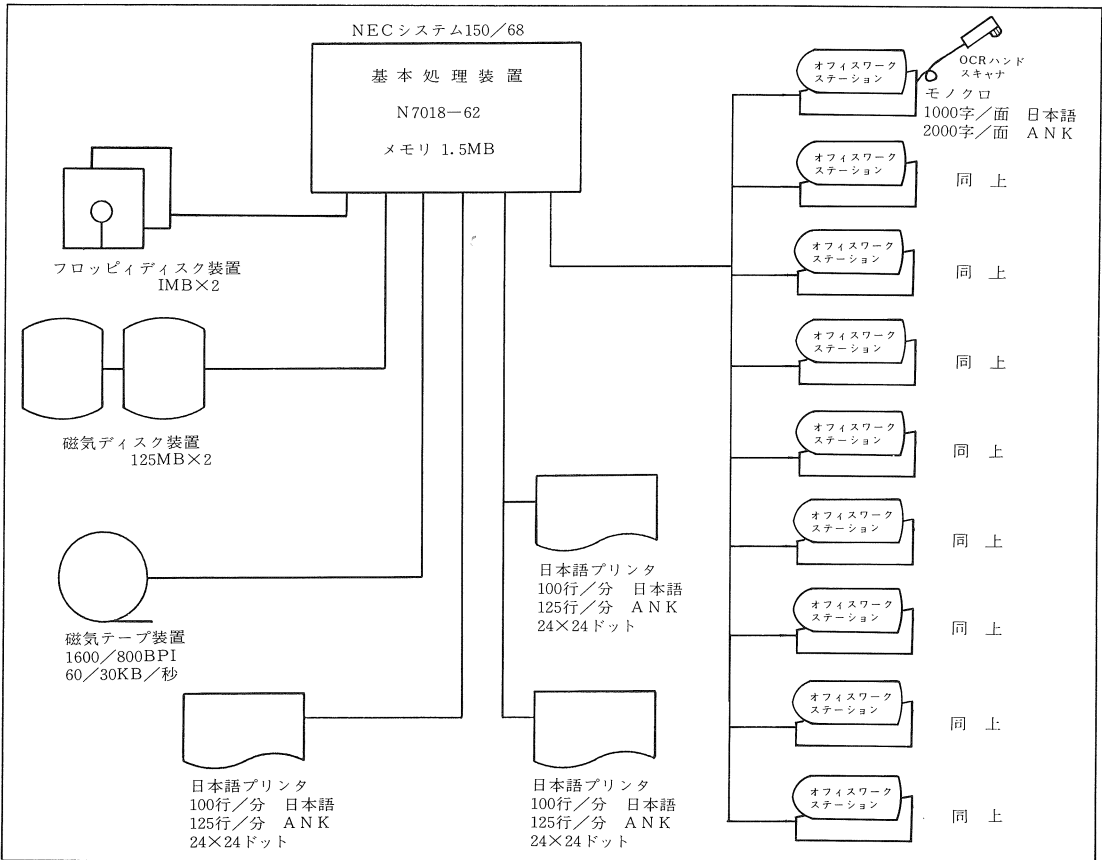


図1 機器構成

I. オンライン目録

本システムのオンライン目録は、利用者開放されたコンピュータ目録です。利用者の皆さんが直接キーボードのキーをたたいて、所蔵する図書の日録データをディスプレイ画面に呼び出すことができます。(図2)

*****資料検索*****

検索語 (書名・著者・キーワード・分類記号など)
をタイプしてから実行キーを押して下さい。

検索語	該当冊数
1.	

図2. オンライン目録初期画面

検索語としては、この機会に、従来の書名、著者名、分類番号に加え、外大特有の情報要求に応じ、キーワードとして国名(地域名)、言語名、民族名などを新設しました。例えば「タイ」とキーを打って検索しますと、タイ国について書かれた図書が画面に表示されます。(図3)

操作の詳細については、閲覧室カウンターで「オンライン目録利用ガイド」を配布しています

のご利用下さい。

米国では、多数の図書館でオンライン目録が提供されるようになったのは、1980年代になってからとされますが、日本の図書館では、日本語処理というハンディキャップもあって、普及はこれからという段階です。

現在、広く用いられているカード目録が、それまで使われていた印刷冊子体目録に取って代ったのは19世紀末から20世紀初め頃で、それは冊子体目録を印刷し、維持するのに要する莫大なコストのためとされます。

恐らくそれは、図書館が近代図書館に変貌をとげ、より多くの人達に利用されるに至る過程、即ち、目録が真に利用者開放された閲覧目録となるプロセスと無関係ではないでしょう。

カード目録からオンライン目録への切替えはかつて冊子体目録からカード目録に切替えた時以上のコストの軽減と、便宜の増大をもたらします。思いつくまゝにその主要なメリットを挙げますと、

- ①検索語の増大による多面検索が可能(カード目録の場合、検索語の増大は、即、目録へのカード繰込み手数の増大を意味するため、自ずと制約を受けた)。今回の国名などのキーワードの新設はこのメリットを具体化したものです。

	現在まで	0冊あと	67冊		該当冊数	67冊
[1]	612.237	35	284571	タイ農村の社会組織 / 水野浩一著.	3階開架一般図書	1981
		347p ; 22cm.		東京 : 創文社, (東南アジア研究叢書 ; 16)		
[2]	302.237	52	284093	見えないアジアを報道する / 永井浩著.	3階開架一般図書	1986
		302p ; 20cm.		東京 : 晶文社,		
[3]	302.237	51	284090	「顔」の悪い日本人 : タイ人から見た日本人論 / インタラタイかつ代著.	貸出中	
				東京 : 学生社, 1985. - 230p ; 19cm.		
[4]	298.3	1	281196	大南洋地名辞典 : 3 / 南洋経済研究所編.	松尾 大研究室	
				東京 : 第一書房, 1986. - 169, 224p ; 22cm.	復刻版.	
				内容: 泰國及佛領印度支那.		
[5]	302.237	49	278917	日タイ比較文化考 / 岩城雄次郎著.	3階開架一般図書	1985
				東京 : 勁草書房, 235p ; 201cm.		
	次頁へ	→ 前進	前頁へ	→ 後退		
				見終わったら	II キーを押す	∧

図3. キーワード「タイ」による検索結果(第1ページの画面)

- ②貸出状況や研究室貸出図書の所在位置、開架図書のオンライン表示(従来、これらの情報は目録に反映されず、各々別々のカード・ファイルを維持、参照していた)。
 - ③業務処理上の大きな効果は、カード目録時の、カードをカードボックスに繰り込む、単調で、誤り多い配列作業からの解放。
 - ④検索語の変更、修正の容易さ。従って、検索語体系をより情報要求に即したものに改良可能という柔軟性。
 - ⑤図書の目録データが作成されると、直ちに検索可能になるという目録のアップ・トゥ・デイトな性格(カード目録時は、カード繰り込み終了までのタイム・ラグあり)。
- 多分、オンライン目録の導入は、かつてのカード目録の採用に劣らず時代を画するものと思われる。カード目録の採用が近代図書館の躍進に伴ったように、今後の図書館の飛躍に寄与することを期待したいと思います。

II. 処理の概要とその効果

1. 図書管理システム

(1)発注処理(図4)

画面1

*** 発注処理 ***	
発注番号	850101
発注日	85/ 1/ 1
1. 書店	<input type="text"/>
2. 請求者	<input type="text"/>
3. 単・継	<input type="text"/>
4. 予 価	<input type="text"/> 円
5. 書名カナ	<input type="text"/>
6. 本書名	<input type="text"/>
7. 著者名:	<input type="text"/>
8. 出版:	<input type="text"/>
終了=PF9 キー	

図4. 発注処理の画面

書店、請求者、単品か継続かなどをコードで入力します。書名カナ、書名、著者名、出版事項を入力します。

なお、発注に先立って、オンライン目録を使い重複調査を行います。

(2)発注図書リストの作成

発注日、書店、和洋を指定して、発注リストを打出します。

従来、発注時には、発注票ファイルに発注票を書名順に配列し、納品時には、その

ファイルを指で繰って当該発注票を探していましたが、この作業が不要です。

(3)未着図書リストの作成

納品の遅れている図書のリストを打出します。

手作業時の、発注票のファイルから1枚ずつ発注日をチェックして納品の遅れている図書の発注票を抜き出し、書店ごとにまとめて、コピーするという一連の作業が必要なくなりました。

(4)受入処理

納入価格、資料タイプなど受入データを入力します。

(5)支払処理

予算をもつ各教官などから予算差引が行われ、予算が更新されます。同時に登録番号が与えられます。

手作業時に比べて、処理件数が少くなり支払書類の作成労力が軽減化されました。

(6)予算現況表の作成

教官別の予算の現況を任意の時点で打出します。

手作業時の、研究室毎に予算を差引きして帳簿に記入する作業が不要です。また、予算の残額、執行状況についての問合せに、迅速に回答できます。

(7)目録処理

発注・受入処理時に与えた簡易な書名等のデータに、より詳細な目録データを加え(図5)、検索語を与えます(図6)。

受入区分	購入	*** 目録 2 ***	発注番号	650005
1. 本書名	アジアの都市と建築			
2. 副書名	伝統都市、植民地都市、貿易都市			
3. 巻 号				
4. 著者:	加藤祐三編			
5. 版 /				
6. 出版:	東京	:	鹿島出版会,	1986
7. 対照:	329p	:	19cm	
8. 〇書:) (世界の都市文化シリーズ)			
9. 注記:				
10. 著者				
11. 版/				
目録1=PF11, 修正=1~11				
目録3=PF13, 確認OK=IIキー				
確認-->				

図5. 目録処理の書誌データ入力画面

複本や多巻物の場合、最初に作成した目録データをコピーして利用し、入力手数を省くことができます。さらに、熟語登録を活用すればデータ入力はかなり能率的です。

受入区分 購入 *** 目録 3 *** 発注番号 650005

アジアの都市と建築：伝統都市、植民地都市、貿易都市 / 加藤祐三編。
 - 東京：鹿島出版会，1986。 - 329p；19cm。
 - (世界の都市文化シリーズ)。

検索語

目録1=PF11, 修正=1~11
 目録3=PF13, 確認OK=IIキー 確認 ->

図6. 目録処理の検索語入力画面

(8)整理速報の作成

1週間に1度、配布・掲示される、目録処理完了の図書のリストが打出されます。

(9)目録カードの作成

従来どおり維持している書名目録カードを打出します。

(10)処理段階リスト

発注から目録に至る処理の流れの中で、特定の図書がどの過程にあるのか、あるいは、その過程の特定の位置にあるのはどのような図書を調べる時に打出します。

手作業時には、このため別に教官別の発票ファイルの維持が必要でしたが、これも不要になりました。

(11)受入・整理統計の作成

和洋別、資料タイプ別、教官別、言語別、費目別、書店別などの統計を打出します。

手作業での集計、作表作業が不要になると同時に、従来作成されなかった統計まで容易に作成可能になりました。

また、全体として、発注から目録に至る図書整理期間がかなり短縮したことも大きな効果といえます。

2. 閲覧管理システム

(1)貸出・返却処理

利用者カード(図7)のID番号と、図書に貼布されたコンピュータ可読(OCR)番号をハンドスキャナーでなぞると、誰にどの図書が貸出されたかが入力され、貸出手続が終了します。

返却時は、図書のOCR番号をハンドスキャナーでなぞります。

従来、利用者は、貸出に際して書名や氏

LIBRARY CARD

氏名 _____

所属 _____

身分 _____ 有効期限 _____

大阪外国語大学附属図書館

図7. 利用者カード

名などを貸出票と利用者コードに記入していましたが、図書の貸出については記入不要となりました。返却に要する時間はほとんどゼロになりました。

業務面では、手作業時に行われていた、2枚複写の貸出票(各々、請求記号順、利用者番号順に配列)の配列、維持は必要ありません。返却時の両貸出票の抜き取り、利用者カードのチェックも不要になりました。

(2)研究室の貸出・返却処理

研究室への長期貸出・返却を上記の一般貸出と同様処理します。

研究室貸出図書カード・ボックスの維持が不要になります。

(3)研究室貸出図書リストの作成

研究室を指定してこのリストを打出します。

(4)貸出状況問合せ・予約処理

どの図書が誰に貸出されたか、誰が何を借出しているか(本人のみに表示)、問合せできます。また、同時に貸出中の図書の予約が可能です。

(5)返却延滞者の督促リスト作成

返却期限を過ぎた利用者のリストを打出します。

手作業時の、貸出票ファイルからの延滞者貸出票の抜き出し、督促リストへの転記などの作業が不要になりました。

(6)閲覧統計の作成

分類別、学年別、身分別、あるいは言語別等の貸出統計を打出します。

午前中を費していた前日の貸出統計の集計、記入、月末休館日に行っていた月間統

計の集計、記入が必要なくなりました。

3. 雑誌管理システム

雑誌、紀要の受付、支払、精算、製本等の処理を行い、これらの業務に必要な、契約リスト、受入雑誌一覧表、欠号・未着雑誌一覧表、精算雑誌一覧表、打切予定雑誌リストなど随時プリント・アウトします。

また受入雑誌の分野別統計も自動作成します。

主要なメリットは、これらのリストや統計の作成が大きく省力化されたことが挙げられます。また、これら雑誌、紀要はオンライン目録で検索可能です。

さらに、以上とは別個に、種々の統計プログラムを作成して、実態を数量的にとらえ、それを図書館運営に活かすことが可能になります。例えば、図書の貸出回数計数プログラムは、その結果を、図書の収集方針や、重複して購入すべき図書の判定等に反映させることができるでしょう。

また、個別的な効果を越えて、上記諸要素の相乗効果としての図書館のイメージの刷新こそ最大の効果といえましょう。

Ⅲ. いくつかの課題

1. 学術情報センターとの接続

学術情報センターと接続する大学図書館は、61年度末現在で、私立大学を含め38大学の予定ですが、本学も学術情報センターのタスクフォース（特別研修員）への館員派遣など準備を整え、61年度末、遅くとも62年度当初には接続が実現する予定です。

学術情報センターは、全国の大学図書館と計算機センターをコンピュータとデータ通信網で結び、大学等の研究者に学術情報を迅速、的確に提供する、学術情報システムの中核機関です。

学術情報センターと接続すると、その主要な機能の一つであるオンライン共同分担目録システムに参加することになります。このシステムに加入することによって、全国の大学図書館の図書・雑誌の所蔵状況をオンラインで検索して、文献複写や相互貸借を依頼することが可能になると共に、センターのデータベースからの既成

の書誌データの取込みによる省力化が期待できます。

勿論、図書の所蔵データベースは、一挙に形成されるわけではなく、接続館の所蔵データ入力によって漸進的に蓄積されています。

2. 書庫の図書、目録データ入力

60年6月の閲覧システムの開始は、利用の多い開架図書約27,000冊の目録データ入力を了えて行われましたが、61年12月末現在では、約8万冊のデータが入力されています。

新規受入図書は、60年11月の図書管理システム稼動以後すべてデータ入力されていますが、それと同時に事務当局の理解を得て、書庫の図書約35万冊の遡及入力プロジェクトが進行中です。当面、書庫の図書の内、利用頻度の高いと見込まれる13万冊を入力する5カ年計画が鋭意進められています。

3. 非ローマ字データ等の処理

当館の扱う、タイ・ビルマ・アラビア文字などの非ローマ字は、カード目録の時と同様、原則としてローマ字化して処理します。但し、ロシア語のキリル文字については、ローマ字化せず、そのまま入力しています。ただし、キリル文字の入力はタイプライターの操作より煩らわしく、改善の必要があります。

また、ウムラウトやアクサンなどの音標符号の入力も現状ではできませんので、外字登録の検討が必要でしょう。

4. システム保守体制の強化

本システムの特徴の一つは、ソフトが分り易く、柔軟性にすぐれ、自館でソフトの保守がかなり行えるという点にあります。従って業務上、あるいはサービス上次々と生ずるシステムへの改良要求を大部分吸収していくことができます。

現在、数名の要員で、このような要求に応えてプログラムの作成や修正を行っています。

このたび、このようなシステムの保守に、より組織的に対応するため学術情報係が新設されましたが、今後この係を中心にシステム保守を担当できる層を厚くし、図書館のシステム保守体制を強化していく必要があります。

ザルツブルク大学附属図書館について

Dr. マンフレッド・セルナー

ザルツブルク大学の歴史は波瀾に富む。もとは1617年に（ローマ・カトリックの）神学大学として創立されたが、やがてその他に人文学部・法学部・医学部が増設された。1810年ザルツブルク大学は解体され、1850年に再び神学大学に取り立てられる。戦後再建されたのは1962年のことである。当時は神学・人文学・法学の3学部であったが、1975年には理学部が増設された。その上に医学部が設けられようとしている。その暁にはザルツブルク大学は典型的な総合大学となる。現在およそ12,000名の学生が在籍している。

旧市街と呼ばれるザルツブルク市の中心地に大学附属図書館の建物がある。大学附属図書館の任務は大学が所有する一切の資料を目録化し管理することである。図書館の中には総合目録室の他、大小さまざまな閲覧室がある。図書館として特に誇らしく思われるのは、古い書物、教科書を集めていることである。

本図書館の蔵書は、中央図書館と各学部附属

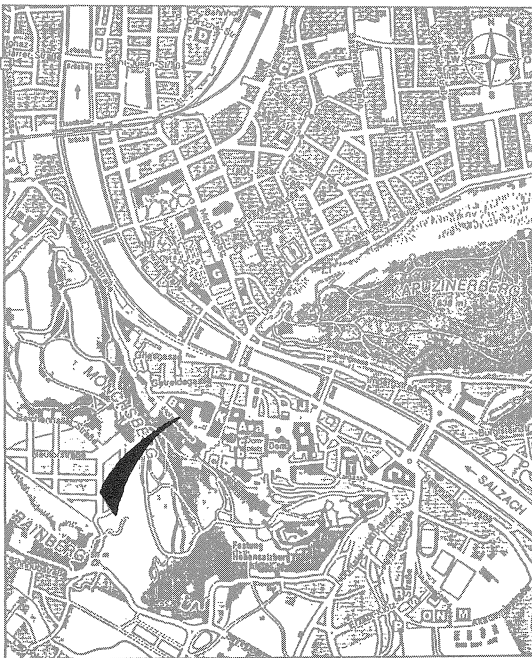
図書館に分けて収納されている。この各学部附属図書館に収納される書籍ならびに雑誌は、各学部が自立的に注文するもので、そのための予算が各学部によって年間一定の額分配される。この仕組みによって各学部のそれぞれ特有の希望に対応できるのである。大学附属図書館は原則として一般的な書物を購入するが、多くの専門雑誌や内外の新聞も購入している。

多くの教授ならびに学生は、自分の求めている書物が大学附属図書館に備えられているかどうかを見るために、わざわざそこまで蔵書目録を検索しに出かけなければならないのはとても手間であると考えている。というのも各学部の建物はザルツブルク市の方々に散在しているからである（地図参照）。しかし、やがてすべての蔵書がコンピューターに記録され、わざわざ大学附属図書館へ出かける手間を省いてくれるであろう。

もし求める文献が大学附属図書館になければ〔国際図書館貸出サービス〕を利用することができる。その文献がヨーロッパのどこかの図書館にあって貸出可能であるかぎり、1ヶ月以内にそれは手元に到着するであろう。

文献をさらに広く探索する可能性として「コンピューター＋通信衛星」を使う方法がある。その場合にはアメリカ合衆国のデータバンクを利用することになる。このサービスはなるほど費用はかかるけれども、近代的な学問を行うには欠かすことができない。

もしあなたがザルツブルクに来られることがあれば、ぜひ大学附属図書館を訪れられるようお願いしたい。それは建築上も興味ある建物であり、ガイドつきで見学することができる。図書館の所在地は、A-5020 Salzburg, Hofstallgasse 2-4 である。大学附属図書館の向いにはかの有名なザルツブルク・フェスティバル・ホールがある。そこでは毎年これも世界に名を知られたザルツブルク音楽祭が開かれる。



学術情報センターと教育・育成プログラム

— 「タスク・フォース」を体験して —

学術情報係 青山 功

学術情報センターの文献目録サービスは、学術情報を収集、整理し、その所在情報を提供するものであり、全国の大学図書館に所蔵する図書、雑誌の情報に関するデータ・ベースをシェアード・カタログニング（分担目録方式）で構築することを目的としている。言い換えれば、学術情報センターを中枢とした大学図書館間の学術情報ネット・ワークを作り上げようとしている。

昭和61年5月末日現在で、このネット・ワークに参加・接続している図書館は私大を含め16館であったが、本年は外大を含め多数の図書館が接続するものと予想される。

接続に伴い当然必要となるのが、センターによる接続図書館、接続予定図書館に対しての教育・育成プログラムである。現在存在するメニューは、①目録システム講習会（3日間）、②データ・ベース担当者養成研修（11週間）、③タスク・フォース（6カ月、又は12カ月）、そして、センターの目録システムだけでなく、学術情報システムを構築するための広範囲の知識・技能を研修する④セミナー（15週間）の4つがある。ここでは、昨年私が6カ月間タスク・フォースとして特別研修員制度に参加した内容について報告する。

昭和61年4月にタスク・フォースとして全国の図書館からセンターに派遣されたのが女性2名を含む8名であり、「老若男女問わず」と言ったところであった。研修期間は4名が6カ月間残る4名が12カ月間であった。研修（実務）内容は噂どおりに非常にハードであった。3日間の目録システム講習会以外に講義らしきものはなく、殆ど業務を通じて知識・技能を身につけるOJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）であった。

着任3週間後、個々に次のような担当業務が決められた。①学術雑誌総合目録の編集・整理

②目録システムの性能評価、③ILLシステムのチェック、マニュアル作成、④目録システム・コーディング・マニュアル作成、⑤IRシステムのチェック、⑥目録システム講習会用テキスト作成、⑦総合目録DBのメンテナンス・チェック、⑧DB研修、セミナー全般、いずれもプレッシャーの懸かるものばかりであった。8名それぞれに業務が異なるということは非常に厄介であった。というのは、同一業務の中でのOJTであればお互いの情報交換も少なくなくて研修も進められるが、異なった業務でのOJTなので密に情報交換をしないと相手からの知識・情報を得ることができなかった。しかし、それぞれの業務に追われ殆どそのような時間をもつことが出来なかった。救われたのが、毎週月曜日の午前中に行われたタスクの定例会であった。この場で、お互いに業務内容、進み具合などを報告しあい、最小限に業務を掌握しあった。唯一のタスクだけの時間であった。

ここで私の業務日誌を捲ってみると、

- | | |
|-------------|------------------------|
| 9：00～10：30 | 目録システム保守プログラムのデータ・チェック |
| 10：30～11：00 | センター見学者に対するデモンストレーション |
| 11：00～12：00 | 講習会用テキスト作成 |
| 13：00～15：00 | DB研修のサポート |
| 15：00～17：00 | 目録システム(DB保守)会議 |
| 17：00～18：00 | 負荷テストの資料作り |
| 18：00～21：00 | 学総目編集・整理 |
| 21：00～22：30 | 講習会用テキストのワープロ・パンチ |

このようなスケジュールが約180日間続いた。研修終了1ヶ月前の9月頃からは講習会用テキスト作成に追われた。プレッシャー、体力、時間との戦いであったが、長崎大のTさんと二人でなんとか期限までに作り上げることができた。

私見ではあるが、タスク・フォース制度において、センターの系統的な教育というものは殆どない。タスク・フォース個々が目的意識を常に持たなければ、単にセンターのヘルパーに終わってしまう恐れがある。積極的に行動、情報交換を行えば非常に身につく研修であろう。最

後に、全てのタスク・フォース慣れぬ東京生活の上、特別研修でありながら長期併任扱いということで、身分、生活面においてかなり苦労した。今後、センター及び派遣大学のタスクの生活面におけるより一層のサポートを期待したい。

紀要週報サービスのスタート

学術情報係

本年（62年1月12日）より、紀要週報サービスを開始しました。

紀要週報サービスとは、日々単位に図書館に受け入れられる紀要類の記事を部門別（言語・文学・人文社会）に集め、毎週月曜日に発行・配布し、雑誌記事索引（日外アソシエーツ編集・発行）の3カ月のタイム・ラグを補うものであ

ります。

このほか、3カ月位の周期で、各語科別に関連する紀要記事の索引を作成・配布する予定です。尚、累積版の紀要記事索引及び所蔵目録は従来のカード形式の目録から冊子体目録に変更しました。

IFLA東京大会参加記

整理係 松延 秀一

外大のようなところだと、国際交流（つまり“人”の交流）など、教師や学生にとっては日常茶飯事のことであろう。しかしながら、日本の図書館界は、昨年夏のIFLA 東京大会でその第一歩をやっと踏み出した。この大会は、日本初しかも今世紀のうちに再び日本で開かれることはないだろうと言われたものであった（ハレー彗星になぞらえられもした）。筆者も参加したがごく一部の分科会のみなので、断片的な参加記になる。

IFLAとは IFLAとは、International Federation of Library Associations and Institutionsの略称で、国際図書館連盟の訳語があげられている。本部をオランダのハーグに置く。図書館人、図書館関係団体の国際組織であり、ユネスコとも密接に協力し、図書館事業の国際的な振興をめざしている。各国で毎年大会を開いており、昨年（61年）の東京大会は52回目、アジアで

は2回目であった（アジア初の大会は1980年のマニラ）。大会の中心は、諸種の部会（division）、分科会（section）であり、さまざまな研究テーマによるレポート発表が行なわれる。図書館界の国際学会と思えばわかりやすいかもしれない。**聴覚障害者分科会** さて筆者は、8月27日のこの分科会のレポーターとして参加することになった。この分科会は、公共・学校図書館部会の社会的弱者に対する図書館サービス分科会（Section of Libraries Serving Disadvantaged Persons）の中の一つとして設定された。運営担当は、IFLAのWorking Group on the Library Needs of the Deafであった。レポートのテーマは「聴覚障害者と図書館—日本の現状」であり、内容として、日本においては公立・大学・学校いずれの図書館も、聴覚障害者のためのサービスや条件整備はほとんどなきに等しいと述べたものである。この分科会には

大学図書館員の出席者もあり、聴覚障害をもつ学生のために最低限どんなことをやればいいのかの質問もあった。手話を覚えることができればいいがそうでなくても、カウンターでの配慮は必要だ、と答えた。

コミュニケーションの方法 国際会議となると、やはり語学である。IFLAの公用語は、英・独・仏・露。当初はこれに尻込みした人も多かったらしい。日本語通訳が必ずつくってわかってから急に申込みが増えたとか(?)。海外から680名に対し日本からは、1,600名近くに達した。

ところで分科会である。私自身が聴覚に障害を有しているという状況で、どう進めていったかと言うと一。レポートについては、英語版と日本語版とを作成、口頭発表は英文版の要約を作成して読み上げた。質疑応答については、英語→日本語(同時通訳ではない)→手話通訳・要約筆記通訳というやり方で行なった。少々時間がかかったが、やむをえない(要約筆記とは

OHP上に透明なロールをのせ、その上に話された事を文字化して書き、スクリーンに映し出す同時的な通訳方法。手話を知らない聴覚障害者向け)。

その他 社会的弱者関係では、他に、ビデオ字幕入力装置とか視聴覚資料利用とかの、聴覚障害にもかかわるテーマのレポートを聞いた。

これとは別に、整理係ということで、書誌情報部会や分類・索引分科会にも出席し、ペーパーを持ち帰った。書誌とか分類とかの技術的な分科会は、満員で立つ人も出るくらいだったのに、社会的弱者とか盲人関係の分科会出席者はケタ違いに少ないのであった。「弱者」はやはり少数者(minority)かと、レポーターの1人としては寂しい思いを禁じ得ない。それでもやはり図書館は、ハンディキャップを負う人々をも、利用者として職員として、迎え入れる責務を有するのである。

—貴重図書解題シリーズ—

『サアディー全集』写本について

ハーシム・ラジャブザーデ
香川優子

本学所蔵の貴重図書の一冊に『サアディー全集』の写本がある。(reg. No. Pe-330-3)

ペルシア六大詩人の一人であるサアディー(1292年没)は、『薔薇園』、『果樹園』の二代表作のほかにも多くの著作を残し、「実践道徳の最高詩人」と呼ばれている。彼の全集は、没後42年を経た1334年に初めて編まれて以来、営々と筆写されイスラーム世界全体へと広まっていった。現代でも、古典詩の伝統を大切にしているイラン人にとって、サアディーは最も敬愛すべき詩人の一人である。

写本は、19世紀に至るまでイスラーム世界の主たる書籍形態であった。8世紀には、早々と中国から製紙技術が伝えられ、ヨーロッパに比べれば紙の供給量は余程豊かであったにも拘らず、活版印刷術の発展が立ち遅れたからである。たとえば、イラン初の近代的印刷所は、1816年

にタブリーズに開設されたが、それ以降も写本は続けられたという。アラビア文字の複雑さ、識字率の低さに加えて、中国や日本に匹敵する書道の発展をみたイスラーム世界において、アラビア文字が単なる言語記号を超えた芸術的意味を帯びるに至ったことも、この写本の歴史の息の長さに関係しているのかもしれない。

さて、本学所蔵の写本に戻ろう。巻末の筆写者自身の記録によれば、この写本は1832年に完成された。写本の依頼者や筆写者についての詳細は不明であるが、筆写者は名をユーソフという。完成地は、イラン東部ホラーサーン地方にあるBādġir-e Hājir Mir Abol Hasanという村で筆写者はどうやら当時のカージャール朝の貴顕の滞在地に向かうべく、隊商に混じって旅行中にこれを筆写したか、完成させたかであろうと考えられる。

写本は、皮表紙(293×182mm)付きで、総頁数510。右開きで、主に黒インクで筆写され、表題や引用句には所々赤インクが使われている。全頁に亘って金色の枠取りがあり、巻頭の2頁に代表される華麗な装飾が、9カ所の表題部分に施されている。当時の慣習に則って、筆写者はまず各頁の中央部を横書きで埋め、続きを余白に沿って斜めに書き込んでいく。頁数は記入されないが、最後の語を各頁の末尾に別に示しそれを次頁の冒頭で繰り返すことによって、頁の続きを確認させる仕組みになっている。

次に、全集の構成であるが、これは底本の種類や筆写者の好み等によって、多くの異本がみられることになる。当写本では、初の全集編集者であるピントウーンの序文(4頁)、現在では疑問視されているサアディー自身による序文(3頁)のあと、散文論考類(35頁)、「果樹園」(74頁)、「薔薇園」(126頁)、アラビア語頌(57頁)、抒情詩(13頁)、その他の詩等(188頁)という順序で、全集がまとめられている。

最後に、書体には主にペルシア人の発明によ



るナスタアリク体が用いられている。ほかに表題や引用の一部には、これもペルシア独自の草書体であるシェキャステ体、アラビア語部分にはナスク体が使われている。

筆写者の筆は、頁が進むにつれて次第に鈍り書体が雑になったり所々に誤りが見られるなど欠点も挙げられるが、全体としては美しくまとめられた佳品であるといえる。

編集後記

◇ 現代の物質的不自由の少ない時代にあっては、人間の本来の創造は後退し、選択が創造と同義に語られる。創造がもつ本性(文化)は、自然と人間との葛藤と調和から生まれたはずなのに、科学技術の発展は非常に高度な段階にあると同時に、問題を多々孕んでいる。それらを解くためにこそ真の叡知が現在要請されている。そのような状況において、大学図書館はいかにあるべきか……。

◇ 新たに図書館情報誌「Library Information」の発刊によって、〈大図書館の現在〉を検証し、いささかでも〈人間の創造性〉を触発し得れば、と期待する。

◇ 表紙の写真は、本学所蔵の貴重図書「サアディー全集」写本の標題紙をカラー印刷したものである。

◇ 次号の発行は6月の予定。多くの方々の寄稿、御意見を寄せられんことを。

(H.K)

LIBRARY INFORMATION

— 創刊号 — 1987年3月25日
 編集発行 大阪外国語大学附属図書館
 印刷 ユニワールド印刷センター